

もしも明日があるとしたら



kei M

第二希望

一番欲しいものはと聞かれたら、二番目に欲しいものを答える。

一番欲しいものはもう持っているから。

大切すぎて、言葉に出来ないものだから。

というわけで、二番目に欲しいもの、というところまた甲乙-乙丙か、つけがたい。

最新のオーディオ装置、3Dの見れるテレビ、DV各種、ウィス・アンダーソンは外せない。フォルクス・ワーゲン、スポーツタイプの自転車、それを入れる車庫。家の照明も一新したい。それより家か。大きなマンションをまるごと。山も欲しい。原生林のくせに山の幸が豊富な山を一山。

DVDもそうだが、それより本。図書館全部、とか言いたくなる。畑正憲、ムツゴロウ氏が北海道に移住する時、文庫全巻買って持っていった、というのも理想的。

食も最低限はある。健康だって必要だ。安全性、そして、金。

だから夜中に自宅兼仕事場に福の神が現れて、願いを叶えてあげるって言われた時、僕はすぐには答えられなかった。

福の神は優しくった。僕の欲しい物について時間をかけて耳を貸し、相談にも乗ってくれた。そして

「物事は、前向きに解決しないとね」と僕の腹にポケットをつけてくれた。そう、ちょうどドラえもん装備のポケットだ。そこから君がほしい物が、いつでもなんでも取り出せるよ、と。

もちろん人前でおおっぴらには使えない。ちょっと小腹がすいたからって、りんごを腹から出すほど、腹が座った性分でもない。でも、慣れてしまえばとっても便利な代物だ。

そうそう、旨いコーヒーマーカー、スマホにパフォーマンスのいいコンピュータも必要だ。

それから彼女。美人で優しくて料理ができて家事がこなせて完璧で、よく笑って、それからそれから、僕の言うことを何でも聞いてくれる。

もう可菜子の愚痴を聞かされる必要もない。

あいつのわがままも無駄使いも大食いも大酒飲みもおさらばだ。

人目をはばからない馬鹿笑いも、ヒステリーも、行儀の悪さももう他人ごと。

それから、それから、

このポケットを、可菜子が見たらどう言うだろう。

※※※※※※※※

- 惣太は何が欲しいの？
- 金、金、この世は金だよ。
- 仕事辞めるの？
- やめて海外旅行だよ、好きなだけ金も服も湧いてくる。手ぶらで世界一周だ。可菜子も来るか。
- ゾウはどうするの？
- どうせ毎日帰ってくこないんだから、放っておいてもいいんだろ。ネズミでも鳥でも、カエルでももぐらでも何でも捕るって言ってたじゃんか。
- もう歳だから、ちょっとそっちは大変そうなんだ。
- じゃあ、誰かに餌をやりに来てもらおうぜ、妹にでも頼んだらいいだろ。
- でもさ、でも、ゾウが。

ネコと天秤にかけられるとは思ってもなかった。

※※※※※※※※

- じゃあ何でも出てくるわけだ。明日締め切りの校正が一本あるんだけど、そういうのも完成品が出てくるの？
- 来月の雑誌が出せるから、それを写せば？
- ふうん。

明日出してみてよ。今から仕上げて納品するよ。それがどう変わるか比べてみよう。

※※※※※※※※

ガールズトーク:

- ねえ、昨日読んだ本なんだけど、もしも欲しい物がなんでも出せる人がいたら、花ちゃん、なに頼む？
- なんでも無限に出せる打ち出の小槌。可奈子は？
- ううん、昨日言えなかったんだけど、
- え？
- ううん、なんでもない、でもホントに出して欲しかったのは、おばあちゃんなんだ。母方の、いつでも絵を書いていたおばあちゃん。それからおじいちゃんも。小さい時雀の絵を筆でサラサラって描いたの。普段は怖いおじいちゃんだったから、欲しいって、どうしても言えなかったの。あの雀の絵、と言うとおじいちゃんに失礼だから、おじいちゃんを丸ごと。
- 可菜子のおじい様ってもしかして、玄関に飾ってある写真の？ あの方ならいつも可菜子の後ろにいるじゃん。

※※※※※※※※

- なんでも出せるんだぞ、何がいい、なんでも言ってみな。
 - ううん、
- しばらく考えた末、可菜子は上目遣いに聞いてきた。
- おばあちゃんの家。
 - いつも話してる日本家屋か、でっかい門をくぐると縁側があって、右手のくぐり戸を抜けると納屋、洗濯場。
- 縁側から家に上がると四畳ほどの洋間があって、応接セット、その向こうが畳の和室だろ。開け放つと庭が見えて。土間は左手。二回に続く階段があってって、

— あ、冠木門もつけてね。

私の話、聞いてた？

※※※※※※※※

- 仕事、やめちゃうんだ。
- だって金に困らないんだ。働く必要なんかないだろ。
- そうだね。じゃ、あたし、もう帰るよ。来週までのレポートあるから。
- なんだよ、気取るなよ。
- んじゃ、またね。

※※※※※※※※

やめてやる。

一気に辞表を叩きつける。

辞表はもうフォルダにできている。

日付を入れるだけでいい。

こいつを開いて部長の席の横のプリンタで印刷して、判子押して、

マニュアル作っておこう。

引き出し片付ける。

田中さんに借金返して、

ヒロ先輩におごって、

キミちゃんに挨拶して、

ついでに携帯聞いて。

— 山田～、あの資料、もう一回出してくれんか

阿野先輩に資料の検索の仕方をもう一度説教して、

ー 山田さん、飛騨通さんから三番です。

外回りもひと通りして、

ー 山田くん、出前取るっ？

天津飯とチャーシュー麺、餃子、エビチリ、チンジャオ、回鍋肉。。。。

※※※※※※※※

とりあえずアパートを片付けはじめる。

一人暮らし開始から3年。どうしてこんなにもものがあるんだろう。

買ったまま未使用の鍋、見つからず買って、結局家から持ってきたのが見つかったから使わなかったはさみ。壊れ物で使わない美濃焼のコップ。

- リサイクルします？

腹から「自分のことは自分で決めよ。ケツは自分で拭きましょう」指示メモが出てきた。

※※※※※※※※

ー ねえ、マリーアントワネットのお気に入りだったクグロフって食べたことある？

可菜子がテーブルに持ってきたノートや切り抜きを広げながら話しかける。

ー こないだ訳した中で、パブでザワークラウト食べるところがあって、これがまたうまく訳せた、ってお褒めの言葉をいただきて、また料理の訳が回ってきたんだけど、歯触りや風味なんて、書いてある通りに訳すしかないよね。

ー ザワー何とかもそおやって訳してほめてもらったんだろ。それでいいじゃん。

ー ザワークラウトは一緒に食べたじゃん、ほら、坂の上のフレンチで、

言いかけて可菜子が言葉をつまらせた。

— ごめん、バイト先の人と行ったんだ。ごめんごめん。

そんなの初耳だ。

男か、そいつ。

— 仕事で行ったんだけど、惣ちゃんに出してもらえばよかったってずーっと思いつつながら食べてたから。

結局可菜子は「クグロフ」をゲットした。

そいつがクグロフをネタに可菜子を誘わないように。

ただポケットは、クグロフの作り方しか出してくれなかった。

最強のレシピだそうなの。

※※※※※※※※

可菜子、実家でひともめあったらしい。

うちに来たときはもうトラで、暴言罵詈雑言様々わめき、泣きながらも飲んで食って散らかしたまま寝てしまった。

アパート荘の住人が息をひそめていたのがわかる。

寝姿だけは可愛い。

今こいつは何が一番欲しいんだろう。

- 可菜子の今一番欲しいものを出して下さい。

言いながらポケットに手を入れる。

「僕」が出てきた。

※※※※※※※※

- ー あたし、5月末フランス行くよ。
- ー 一足お先に卒業旅行か。
- ー 一年、留学、とれたんだ。ホントはドイツがよかったんだけど、そっちの奨学金は競争激しくってさ。勉強する人はマジするからね。
- ー なんだよ、突然。
- ー こういうことは、勢いだから。
- ー そんなの、自分勝手すぎだよ、無茶苦茶だ、いつからそんなこと。
何を口走ったか覚えしていない。

息が切れたころ可菜子が口を挟んだ。

- ー どこでもドアを出せばいいじゃん。
- ー お前なあ、ドラえもんのポケットじゃないんだぞ。第一、あんなの、マンガだからできることで。

可菜子が僕のTシャツをめくって、ポケットに手を突っ込んだ。

そして、出した。

※※※※※※※※

元気ですか。こっちは暑いです。朝寒かったのに今は半袖。寮は快適です。学食は外。町の人
も来ます。町は観光客だらけ。なんだか黄色い花粉がいっぱい飛んでいます。絵葉書はこの町の
大聖堂。左右対称のを建てたかったんだけど、地盤がゆるすぎて片翼だけでおしまいにしたん
だそうです。そんなアバウトな大建造物を見ていると、惣ちゃんを思い出しました。惣ちゃんも
元気でね。

青い空の元、そびえ立つ石造建築。

がらんとした四畳半でひとり、絵葉書を見つめてしまう。

壁に立てかけられたどこでもドア。

メシ。

足元でみゃあみゃあ催促するのは可菜子のおいて行った雑巾猫。

茶色とクロとこげ茶色という、けったいな配色をしている。

ゾウだけが僕を必要としている。

※※※※※※※※

時々バイトで雑誌に載る、言っていたのはなんて雑誌だったけ。

仏語のミステリをリライトしてる、とか言っていた。

ドイツ語か？

英語だったかもしれない。

短編で、一回が何ページ、でも一週間は軽くかかる、とか言って、よくドタキャンの理由にあがってた雑誌。

なんていう雑誌だ。

雑誌の名前くらいちゃんと書いておけ。

本屋を廻ってやっと発見。苦労させるやつだ。

今日は、載っていなかった。

※※※※※※※※

元気ですか。

語学学校、若いです。

スウェーデンは18才で国費留学をばんばんさせてます。

授業をクリアすれば学費全額(?)支給だって。

おかげでクラスはいい眺め。

北欧系は美形が多い。

行間を、読むべきか、読まないべきか。

※※※※※※※※

ー 山田くん、このところ、しょぼくしてるね。

ー 女子大生に逃げられたんだって。ー あれじゃ地味なおっさんだよ。

てめえら聞こえてるぞ。

ー じゃ、フリーなんだ。

いひひひひ、そうそう、そういう風に話を進めろ。

ー どおしていい男はちゃっちゃと売れてっちゃってんだらうね。

どおいう意味だ

※※※※※※※※

門限はない。

なにをやっても連絡を送る必要はない。

昨日の夜、同期会で飲みすぎた。
同期会と言いながら結局後輩も女の子に限って参加。
モテる天然芸人同期のおかげ。

女の子はみんなあいつを囲んで二次会へ。
男たちはぶつぶつ言いながらその後をぞろぞろ。
チャンスはあきらめるべきではない。

三次会。
あぶれた僕はとぼとぼとあぶれた同期と歩いている。
ポケットから女の子を出すべきか。
ゾウでもいい。
あ、
ゾウの飯。

酔った勢いでポケットから弁当を出した。

同期あぶれ男が酔っ払いのくせに目ざとく突っこんだ。ー きっちり持ち帰りまで詰めてきたのか。
ー そう、おまえの分もあるよ。

※※※※※※※※

飲み会の翌日、社内の周りの視線が変。
誰も彼も僕を見ようとしなない。
そのくせ腹に視線が集まっている。

昨日のことはよく覚えていない。

が、なにがあったか想像はつく。

ー 学生時代にインド言った話はしたっけ。
昼飯の席でわざとらしく切りだした。
ー かくし芸かなんかでカミングアウトしたかったんだけど、あっちで変なインド人からインチ

キ手品習ってな。

僕は何で家で遅くまで、ひとりで手品の練習をしているんだろう。

※※※※※※※※

「理想の女」をポケットから出すぞ。美人。性格よし。夜でも昼でも温かくて旨いものをすぐさま出してくれる女。—これはポケットがやってくれるからいいとするか。掃除、洗濯、これもどうにかなりそうだ。いつも優しく、口答えせず、愚痴もない。歌なんかも歌える。明るくてよく笑って、悪気がない。人当たり満点で、礼儀正しい、歩く姿が芍薬か、とか言うやつだ。三歩さがって男をたてて、帰ってきたらお帰りなさいませ、お風呂になさいませそれともお食事にされますか。こっちが苦しゅうない、頭を上げろ、言うまで正座で三指ついて。こっちの言うことの揚げ足を取るなんて思いもしていない女。置いた皿を揃え直したりしない、言うことに何でも認めてくれて、褒め称えてくれる。あら素晴らしい、惣太さんとか言ってくれたりして。

— ボケるよあんだ。

ポケットから声がした。

※※※※※※※※

元気ですか。

学校、大変です。

アンタのフランス語じゃ点はやれん、とまで言われ。

フランス人は男も女もおしゃべりで、

そんな言葉をやる人間はどこ国籍だろうと強烈におしゃべりで。
寮の隣の住人たちはは、〇〇の最中も。

し・ん・じ・ら・れ・な・い～。

そんな言葉が、平穏なぶどう畑の絵葉書の裏に書き連ねられていた。
見るだけでやかましいと言いたくなる可菜子の字。

※※※※※※※※

年末、クリスマス休暇とやらで可菜子帰国。

— 福の神様、なにが欲しいかな。

開口一番、そっちかよ。

— 神様の欲しい物を出してくださいって、考えながらポケットに手を突っ込めばわかるよ。

— じゃあ私、お正月にサプライズを用意しておくね。

※※※※※※※※

※※※※※※※※

雨上がりの線路ぎわは嫌いだ。

旧市街の外周を離れ、線路を越える大きな通りを、ゆったりとした弧を描きながら登っていく。足元に南に向かう本線が横切る。本線から一筋、線路がそれる。TGVの走らない山へと向かうローカル線は、古びた枕木に支えられている。それが見える頃には道はゆっくりと下り坂となり、やがて線路と平行にならぶ形で地上に降りる。地面に戻るにつれ見えてくる石造りのアパート街、御影石の教会、その向こうには雲のかかった山。空は青い、旧市街から歩いて五分、いきなり静かな郊外にはいる。

この道は基本的にはお気に入り。

けれど雨上がり、もしくは長雨の日はわけが違う。

線路わきの草むらから、わらわらとからかたつむりが這い出してくる。歩いていると次から次へと行き当たる。

踏まれてへしゃげた仲間がいる脇を、構わずのろのろ車道に向かう。

どうして車道を目指すのだろう。草も葉っぱもないアスファルト、何のために進むのか。

カシャ。足元で不意に聞こえる殻の音。軟体動物が詰まっているとは思えないあの軽い音。

それが聞きたくなくて行き当たるごとにかたつむりを拾って線路際の草むらに放り込む。

時々柵にあたって跳ね返ってくる。そしたらもう一度投げ直し。

いくら人通りの少ない道だからといって、行き当たるごとに拾って投げて拾って投げてでは数メートルでいやになる。

人目も気になる。

車も通る。

すれ違う人がいたら見なかったふりをして通り過ぎる。

それでも忘れ物をしたかのようにいきなり引き返し、結局拾って投げたりする。

やってる自分が恥ずかしい。

だから雨上がりはこの道を避ける。

でもこっちが通ろうが通らなかりょうが、かたつむりは変わることなく這い出している。

夜ベットに入って電灯を消す。激しい雨音を聞きながら、明日の朝通る道について考える。

立体交差の道を思い浮かべる。明日はどこから学校に行こう。

そんなことを思いながら寝たせいだろうか。

朝起きたら僕は、小さなかたつむりになっていた。

そうだね、君の言うとおりに。

かたつむりに字が書けるわけがない。

キーボードなんてもっと難関。

どうやってこれをアップしているか、知りたかったら読んでみて。

ただ、ラストだけは最初に言うておこう。

僕は人間に戻れなかった。

小説なんて、出だしを読んで、ラストを知ったら全部読んだ気になれるじゃないか。

少なくとも僕は、カフカの「変身」でそう思った。

あの主人公は人間に戻れなかった。それを聞いただけで僕はもう読まない、と思った。六年生の時だった。

今はちょっと後悔している。

あれはどうして虫になったんだろう。

でもどうせ人間に戻る方法は書いてないのだから、読まなくても良かったんだと思っておこう。

今となってはそう思わざるをえない。

それでも、やっぱりどうしてかたつむりなんだ。

かたつむりと言えば、心に蓋をしていたことがあった。

このアパートに引っ越して間もない頃、小学校四年の秋だった。

「裏庭をきれいにしてくて」

夕方、野球から帰ってきた僕に、母が、あの頃はママと呼んでいた、ママが問答無用に言いつけた。

裏庭と言ってもアパートのとアパートの境にある、幅一メートル、長さ4世帯分の細い敷地で、確かに草がぼうぼう、虫やらなにやらの住処になっていた。ヘビがいてもおかしくない茂みだった。丈は麦畑のところどころにトウモロコシが顔を出している、と言った具合だ。ただ麦はススキで、トウモロコシは菊みたなタンポポみたいなひよろ長い雑草。要は、秋になっても誰も刈り取らない草が、ところ狭しと生い茂っていた。

ついこの間ママは、「お月見にススキを取る手間が省けたよ」なんて言ってたじゃないか。月見が終わったらもうこれかよ、いいじゃないと言おうとしたら、ママはすごい目をしてススキを睨みつけていた。

本当は草刈りなんてしたくなかった。

そんなにやりたかったら自分でやればいいじゃないか。

八つ当たりや無理難題はもうたくさんだ。

そのままプイッと出て行ってやろうと思った。
そして、こんな家、もう戻らないんだ。
でも、パパと同じことはしたくなかった。
だから、せめて草刈りだけはして出ようと思ったのだ。

けれど本当に、草刈りなんてしたくはない。
それも半端な量じゃない。
上に顔を出している、タンポポの化け物みたいなのをすすきの丈に切りそろえる。
そして家を出てやろう。こんな家、もう戻ってくるものか。

腹をくくってススキ畑に踏み入った、足元でパリン、と音がした。そして草や落ち葉、いろんなものを踏んでいる感触。そしてまたカシャ。耳にも心にも蓋をして、僕はひたすらススキ丈に揃えた。うまい具合に日が暮れて、僕はシャワーを浴びに家に帰った。

次の日、学校から帰ると、裏庭はきれいな芝生丈に刈り揃えてあり、アパートの裏に農家にあるような大きな鎌が立てかけてあった。
ママの愛読書はポーの「大鎌」だと気がついたのは、それからしばらくたってからのことだった。
。

改めて見回してみる。ぺんぺん草、タンポポ、ケシ、ネギか？ ススキの葉は広くて、果てしなく空に伸びる。世界はこんなに広がったのだ。

大きく息を吸う。
さてこれからどうしよう。
なんだか息の吸い方が変わった気がする。
僕の鼻はどこにいったんだ。
まあいいか。今日は学校に行かなくていい。
目の前の草を噛んでみる。思いがけない噛みごたえだ。液が飛んで顔にかかる。
僕の顔はどこにあるんだろう。
考えとは別に僕の足は草をのぼり、隣の葉yっぱを噛み切っていた。思慮分別のない行動。本能のまま突き進む。動物ってこんなもの。

食べ疲れて眠くなる。日陰に身を寄せうたた寝していた。眠りを妨げたのは大きなカラス。鼻先で一匹の首根っこをつかむ。気がつくともう周囲は、右も左もかたつむりだらけ。だれもが目の前の

惨事をよそ事のように草をはむ。こっちは頭を引っ込めた。たたきつけられる気配が土から伝わってくる。首がどンドンすくんでいく。ふとしっぽのほうから鈴のような声が響いた。

- 食べられるときは食べられちゃうのよ。今を楽しんだら？

シュガーコーティングされたような女の子の声。眼だけ出して顔を見ようとしたけれど、かたつむりの体ではそれはできない相談だった。叩きつける音がやむかと思ったら別の方向から次々と羽音が舞い降りてくる。カラスがかたつむりを食うなんて聞いてもいなかったよお。他の奴ら、どうして逃げない。しかしこんな歩みでどうして逃げれる。地面に叩きつける音が重複する。世界が暗くなったり日が差したり。助けてくれえええ。

夢を見た

どこかの旧家に嫁いだ夢だった、友人と外を歩いていると、建築現場に通りがかった。友人は「うちトイレ工事中だからここで借りるわ」と、ヘルメットの作業員のいる建物に入っていった。

そして次に場面が変わって、自分が自分の嫁いだ先のトイレを使いに行く夢。

そこは西洋建築で、建物がこれまた工事中。

広くて薄暗いカントリーバーのような空間。床はおがくずを蒔いてあってもおかしくないようなフローリング。フロアを横切り、トイレへと通じる木の柵を外して脇に立てかけた。

そして見下ろすと、1メートル下木目のある和式トイレ。そのまた下は吹き抜けで、階下の台所が遠くに見える。これも台所の神様、荒神さんがいそうな石造りの厨房。まるで薄暗い土間のようだ。

さて、階下まで5メートルはあろうか、トイレは宙に浮いている、足場は皆無に近い。

空中和式トイレに向かって私は果敢に挑戦する。そして、たどりつく。

そのトイレの周りには本やお札、小銭、小切手帳等があり、どう見ても日常使いの空間だ。これが普通？ と疑問を抱きながらも目的を果たし、また昇る。行きも地獄の帰りも地獄、艱難辛苦の七難八苦。

なんとか手探りでフロアにたどり着き、柵を元のように組み立てようとしていると、そこはいつの間にかカントリーなレストランになっていた。

90代くらいの西洋老女がやってきて、

「前の人長かったね」

こっちは知らない人でも平気で話しかけるからこっちもざっくばらんに

「はい、わたしです」

じゃ次に、とトイレに向かう老女。

あ、そこは、と言うより先に90マダムは

「一ヶ月に一回はここに通っているからね」

颯爽とした足どりで、オープンな個室へと消えていった。

夢の中でわたしは狸だった。まだ小さな子狸で、口に小判をくわえ、長い長い石段を見あげていた。はるか上に山門が見える。

山門は開いている。

けれど遠い。白い雲が青い空に浮かんでいる。どこかでひばりの声がある。

- 最後の最後にまた難関かよ。

天竺に続く道ってのはやけに遠いもんなんだ。

夢の中の私はなぜか東(あずま)訛りで、山門をしばらくじっと見上げていた。秋口の暖かい日差しに浮かび上がる大きな木の門。

わたしは腹に力を入れて、よいこらせと立ち上がった。仁王立ちならぬ野中の案山子の二本足、という風情である。案山子にしては少々毛がもさついている。つやがなく、栄養回りが悪そうだ。

石段一段は子狸の肩を越している。上の段に前足をかけ、よっこらせとよじ登る。体をずりあげるとまた立ち上がってもう一段。口元の金貨に傷がつかぬように、あごを上げて上っていると本当にあごがあがってきた。

一段、そしてもう一段。

四段目で山門を見上げる。

万里の道の果ての果ての果ての果て。

ふと見上げると空から黒い物体がつつこんでくる。

烏(からす)。

とっさにかわしたが、烏の羽根にはじかれた。はずみでころころ転げおちる。

四つんばいで身をたてなおし、飛びさった後を見極めようとふりむいたが、右も左もわからない。きょろきょろ見回して、それから上を見上げると、ちぎれ雲が浮かぶ青い空の中から、烏は再度こちらに向って急降下。いや、こっちではない。相手は石段脇の石溝で日の光をうけて輝く、金貨をめがけているのだ。茶色い狸は溝に飛びこみ、鼻先で金貨を弾き飛ばすと、飛んだ先に跳躍して、着地と同時に金貨をくわえあげ、一目散に溝を駆け上った。

気がつくとそのまま山門を走り抜け、脇の植えこみに飛びこんだ。

息をこらす。

あたりはしんと静まりかえっていた。

茂みから鼻先をそつつ突きだしてみた。

動くものはない。

遠くで仏法僧の鳴く声が聞こえる。誰もいない。

烏はあきらめたらしい。

左に鐘つき台があった。その向こうの卒塔婆や墓石はさえぎるものもなく見渡せる。

ここのお寺だな。

右手には庫裏がある。その向こうには女坂に続く細い廻り道。そして正面には古びた本堂。山門は開いていても本堂の入り口はきちんと木戸がたててある。

烏の気配はない。人の気配もない。鐘つき台には鐘もない。

新月の晩に頬かむりの男女が寄ってたかって鐘を外し、持っていったと聞いた。

- そういう人らはこれからあんじょう先まで償いをしていくんや。わいらがいんでも修行すんねんど。生まれ変わって修行して、自分で自分の根性叩きなおしてやっと人間になる。その下ごしらえしたんがああ鐘や。あんな響かん鐘やったけど、ほんまはええ鐘やってんなあ。

住職さんが杯片手に笑っていたらしい。

- 撞き方が下手なせいやて、あんなぶつぶつゆうてたくせに。

小僧さんが言う。檀家さんの鮎がかんてきの上で煙を立てている。

- 鉄砲にされた前の鐘の代わりに檀家がせっかく寄進してくれたんや。撞き手んせいにしとかな檀家来てくれへんなど。

そんな話を西の兔から伝え聞いた。

それをでここに決めたんだ。

私は戸口に向き直り、もう一度後ろ足で立ち上がった。大きく息を吸い、それから肩に力を入れて、思い切って言おうとして、そこで口に小判をくわえていることを思い出した。

小判を前足に抱え、思い切って声を出す。

- たのもお

声がちっとも前に出ない。

空気は震えず、中に聞こえるはずもない。

- たのもおお

十倍も力を入れたはずなのに、それでもすすり泣くような声しか出ない。

もう一度息を吸いなおして、ふと気がついた。

体についた埃を払い、頭のとっぺんもはたく。石溝がこのところの天気だからからに乾いていてよかった。

掃除もきちんとされているのだろう。枯葉のひとつもたまっていなかった。

"日頃の行いだよ"

古老の賽さんがよく言う言葉だ。

葉っぱがないのでお母さんが教えてくれたように頭の上にはっぱを乗せた自分を思い浮かべて、印を切る。

どろろんろん。

この姿で村の子どもと何回も遊んだ。

"それから、今までの経験が自分を支えるだよ"

賽さんもお母さんも、みんなも今はどうしているだろう。

転んだら、花ちゃんが駆けよってくれたっけ。

思い出すと涙がでそうになるった。ふりほどくつもりで大きな声を上げた。

- たのもおおおお。

- お寺にご用ですか。

背中の方から声がした。ふりむくと人間の女の人が立っていた。

白っぽい着物を着て、手には深い緑の風呂敷包みを抱えている。

- お参りですか？ それともお遣い？

- あの、住職さんおねがいしたいのですが。

- おっさん？ ("お"は高く発音) 中見てきますよ。ご用件をうかがってもええでしょうか。何のことか先に聞いといたら、前もってそれなりのこしらえもできるゆうて、取り次ぐときは聞いといてくれいわれますねん。よかったら先に教えてもらえます？

- あの、えっと、はい。

- では、ご用件は？

言葉が出ない一方、手が勝手に動いていた。

女の方は突然目の前に現れた小判に目を丸くした。

- お金？

- あの。これ、住職さんに。

女の方は小首をかしげる。ここまで来たら言うしかない。

- ここのお寺でつかってください。掃除洗濯なんでもします。仏様のこと教えてもらいたいんです。力仕事もできます。なんでもします。どうかよろしくお願いします。

女の方はこっちをじっとみた。何かを言おうとしたけれど、ふっと気がつき引き戸を開けた。

- すみませんね。玄関先で立ち話して。おっさんに伝えてきますんでこちらで待っててもらえますか。

玄関脇の小さな部屋に通された。ちりひとつない畳の上に女の方は正座をし、どうぞあててお待ちください、と座布団をすすめてくれた。

畳というものは外から見たことはあったけれど、上がって見るのは初めてだ。

どうしていいのか戸惑っていると、女の方はまず座って見せてくれた。

- では、呼んで参ります。

両手をついてお辞儀をし、立ち上がるかと思ったら、女の方はずっと耳に顔を寄せ、

- おっさんとはじめてお会いするのですでしたら、まず後のもんは閉まっておいたほうが無難かと思えます。それから、草履を裸足にすることはできますか？

しまった尻尾が出たままだった。

それに女の方はいつの間にか足袋姿になっている。

おろおろする私に、女の方はあれやこれや、いろいろ細かい手直しを手伝ってくれた。

郷の花ちゃんみたいだった。

目が覚めると白いのっぺりした天井が広がっていた。電灯の丸いカバーを見ながら私はゆっくり考える。

そうだ。私は前世、狸だったんだ。

2013/09/02

駅前は商店街

混んでいるからわからないと思った。

見咎められたら、間違えましたですむだろう、古ぼけたよくある黄色いビニール傘を歩きながら抜き取った。

人通りの多い商店街、 駅から出てきた人たちにとって、他の人は風景にすぎないのだろう。誰も気付かない。

天気予報は30%だった。

駅まで徒歩で15分。駅からなら40分。今度の家は自転車で帰ると自分の体力ではゆうに一時間をゆうする。道理で不動産屋が毎回車で送り迎えをしてくれたわけだ。

高台の住宅地からは百万ドルの夜景を足元に見渡せる。

新築同様の築三年、コンシエルジュ付きの七階建て。防音、断熱完備、窓さえ締めておけば夜中にグランドピアノまで弾けると言われた。 急いで走ると駅に五分で着けるのだから、これ以上は望まないことにしよう。

原付、とらないと。

雨足がまた強くなってきた。黄色いビニール傘を叩きつける音が激しい。勢いが手にひびく。水はなめてはいけない。今までいたところは農業地帯で、水の怖さはひとしおだった。この国では安傘でも雨漏りひとつしない。フランスにはこういうもの、なかったよ。思いつつ帰路を急ぐ。さっさと新しい仕事の資料をうちのコンピュータで打ち出してしまおう。仕事の資料が財布にするりとはいつてしまうんだよな。やっぱり日本って進んでる。でも結局、紙に印刷しないと仕事が進められない自分。自分が一番遅れてるよ。 思いつつ駅前の通りを曲がる。通行人がぐつと減る。ここから近道の小道を上がると、長い坂が見えてその先には、

不意に手元が軽くなった。

え？

どしゃ降りが頭の上に肩に背中に、水しぶきをあげる。バックもカバンも流されそうになる。滝つぼの下にはいったかのように直撃してくる雨。

傘は？

集中豪雨、トンペット？ 頭の上は黒雲か。

傘はどこに？

思わず立ち止まったおかげで、後の人がぶつかってきた。

— ごめんやっしゃ。

向こうは機械的に言うと振り向きもせず歩きすぎていく。

こちらはまだ動けない。

呆然として空を見上げた。

頭の上に雨雲が広がっている。

傘はどこにいったんだ？

— あんた花見屋さんで傘借りなはったやろ。

後ろから来た人が、含み笑いをしながら通り過ぎていった。

チャイニーズ・スープ

のれんは日に焼け、窓のない店内は暗い。でも満員。店前に行列。それでついつい並んでしまった。メールチェックに夢中で、女の人がないのには気が付かなかった。だれもが近所のおっちゃん、仕事中、と言った格好。女は私一人。湯気のおいさ汗のおいさ、嗅覚をマヒさせたい店。一人ランチとは思っていたけど、どうしてここに並んでしまったのか。チャーシュー食べたらちゃっちゃと帰ろう。思いつつもメールを見なきゃ。汁が付かないように気を付けながらスマホを出す。ボタンを押して、
— 食うなら食う、携帯お断りや、

どこからか親父な罵声が飛んできた。

私に？

顔を上げる。みんな熱心に箸を動かしている。

話をする人もいない。

みんなもくもくと食べている。そうそう、それよりメールをチェックして

— 店出てやってれ、

え？

見回しても、みんなテーブルやカウンターに向かって、口いっぱいラーメンを食べている。

店の奥は忙しそうな気配。

店の人が出てきたわけではない。

今の声はどこから？

言うなら・面と向かって・言えば

口の中でつぶやきながら携帯に目をもどす。こんなことやってるうちにメールが見れる。それからさっさとバックに入れよう。

クリックした時どんぶりの中身が降ってきた。

目が覚めたら明るい日差しが部屋いっぱい広がっていた。

目覚まし時計が音もなく3時で止まっている。

遅刻だああ、

時間を確認する余裕はない。手当たり次第で着替え、走り出る。

靴下に穴が開いていた。靴を履けばわからない。

鍵がない。定期、定期、きっと昨日のポケットだ、再度靴を脱ぐ。

穴が気になる。

部屋に戻って一応姿見もチェック。一昨日と同じ服、そんなの気にする同僚もいまい。

ドアを閉め、エレベーターを待つ間もなく階段を駆け下りる。

廊下は静かに、張り紙がちらりと目に入る。

どこの暇人がそんなの貼ったんだ、思いつつ13階を一気に駆け下りる。

着地、外は雨。

外、明るかったじゃん、

そこに忘れられた傘があったら、きっと使っていたことだろう。

あの朝の光から打って変わったの土砂降り、再度部屋に戻る。登りはさすがにエレベーター。

なかなか来ない。

再度ほぼ同じことを繰り返し、やっと一階に降りた。玄関ガラスの向こうから明るい日差しがさんさんと輝く。

えええ、

大きな傘しか見当たらなかったから、ひつつかんで来たというのに。

仕方ないのでそのまま走り出た。

うにゅ。

足元が急に頼りなくなった。脇から男の人が驚いたようにふりかえり、あ、と声を上げた。

足元にコンクリートを塗りたてた広い段があった。黒いスポーツシューズが灰色にのめりこんでいる。大事に履いていたのに、引き返して靴を履き替える？ それともこのまま走るしかない。

駅で電車待ちの間に拭うことにしてそのまま走る。

ごめんなさい、というのを忘れていた。

あわてて工法を振り返って首先だけお辞儀をする。

向こうは玄関口を再度塗り直してこちらを見ていない。

今日は最悪。

緑が水滴に反射する坂道を駆け下りる。

今度は足元が前方に滑る。思いっきり尻もちをつく。

足元にあったらろうあろう透明なコンビニのお弁当のふたが、前方に飛んでいく。

お知り泥が。

もっと最悪。

- あたし、この町、向いていないと思う。

こんな時に限って嫌みのように電車がすんなり来る。電車は空いて、靴をきれいにする時間はたっぷりあったのだけれど、ティッシュがなかった。

仕方なしにハンカチを、とカバンを探すと、ハンカチすらも見当たらない。

代わりになりそうなものは予備のストッキング。

こんな時に限ってブランド物。仕方ないと拭こうとしたら、コンクリはしっかりメッシュの部分に固まりこんでいた。

どうしようもなく最悪。

- あたし、引っ越す。

昼休み、終わらない仕事をしながらパンを食べる。

横で弁当を食べていた紫織ちゃんが顔を上げた。

- もっと会社の近くにするの？

紫織ちゃんは会社の隣に住んでいる。

近いから、と入ったそう。

- 家に仕事が持って帰れるほど近いところ。

もちろん今どきの正しい社員はそんなことはしない。

- 家に帰ってご飯を食べて、お昼を食べて昼寝できるくらい近いところ？

- 同棲する？

- 家にいたら会から呼び出され、会社にいたら家からよびだされちゃうよ。

同居の兄嫁さんは今春から詩織ちゃんの祖母介護勤で、仕事を在宅に変えたといっていた。

- 今借りてるとこ、どうもダメみたい。

- 住み心地いいって言ってたじゃん。近所ともめてるの？ 昨日寝れなかったとか？

- いや、よく寝れるんだけど。

- うちの夜、もう全然よ。おばあちゃん、昼と夜がひっくりかえっちゃって、夜って介護ヘルパーさん来てくれないんだよね。小夜子さん、もうやつれちゃって。

紫織ちゃんはすっかり自分の家の話を打ち明けてくれる。こっちは今日の帰り不動産屋さんに行くことばかり考えていた。

結局その日は定時に上がれず、翌日は定例会、その翌日、不動産屋さんは定休日だった。

- よくわからないけど、引っ越したいのね。まずは次の目標を決めたら？ ネットで探した？ 従姉のしろちゃんから電話があったとき相談してみた。しろちゃんは常識をわきまえた人として家では昔から定評がある。この人の後ろ盾だと親から文句もでてきまい。

- ネットがうまくつながらないの。

- あら、不便じゃない？ スマホからとかは？

ー コンピュータも携帯も調子はいいんだ。でも家探そうとすると固まっちゃうの。

ー それは呪いだね。

しろちゃんに言われると不安が確信に変わる。しろちゃんはさらっと言い足した。

ー 嘘だって。緊張するんでしょ。妙にテンションが上がると電気製品って固まったりするのよ。精密機械になるほど体から発する電気に敏感なんだ。スライダーっていうんだけど、まあそれはそれで、まず深呼吸して、ゆっくり検索ボタンを押してごらん。きっと通じるよ。

ー つながらない。

ー あんた、電話しながら繋いでんの、もお。まあ気張らんとがんばって。で、家の契約書ももう一回確認したほうがいいよ。解約の時どんな契約になってるか。次に借りる人が見つかったらいろいろ言われないうし、そうじゃなければ何か月分か家賃入れないといけないかもしれないし。ちゃんと読んで、不動産屋さんに行く時も持って行って。ー いろいろ言われすぎてわかんなくなってきた。

ー メモとって。契約書の確認、それからあんたのその調子だとコピーしておいたほうがいいかもね。不動産屋さんとの賃貸契約書、どこにあるかわかる？

ー 不動産屋さんじゃないの。

電話の向こうで沈黙が続いた。

電話も壊してしまったみたい。疲れてきたのでそのまま切った。

電話は無事だった。その後しろちゃんからまたかかってきたから。とにかく契約書があるはずだから探せと言う。それだけ言うと電話はすぐ切れた。しろちゃんはいつも忙しい。

いろいろ言われたような気がするけど、とりあえず次の日不動産屋さんにもう一回行った。

ー 出るの？ まだ一か月も入ってないでしょ、敷金帰ってこんよ。

どうして不動産屋さんっていつもなれなれしい口のきき方をするんだろう。

ー とにかく出たいんです。解約させてください。

ー なにがあったの？ ご近所と問題発生？ あそこは防音もいいし、よっぽどのことがない限り近隣とはもめないんだけど。あなた何したの？

口をひねってやりたくなる。

ー 私はなんにもしてません。ただ、あの町とは相性がわるいようで。

ー あの部屋、事故物件でもなんでもないんだよ、隣はそうだけど。夫婦げんかの派手なファイナルマッチでね。そこ、来月から空くけど、そっちにする？ 同じ造りで家賃半額。同居人もいるしお得だよ。

隣なんて思いっきりおんなじ町でしょうに。

ー 寸磨とか、滝の茶屋とか、その辺にないです？ 赤石でもいいです。もう。

ー 家賃半額事故物件？ こういうの普通内緒なんだけどね。塩屋町に一件、

ー 事故物件じゃなくていいです。今のところと同じくらいの家賃で。

ー でも、正式にこっちに解約届だしてから一か月、そこと新しいところと二重に払わないと物

件抑えられないよ。払えるの？

— 前金払ってるじゃないですか。

— あれ、大家さん、返してくれんよ。あそこの大家、あこぎだから。

それが不動産屋の言う言葉か。

— とにかく出たいんです。

— ほんとに出たいなら夜逃げすれば？ 残った家具は売っばらってあげよう。金目の家具、あるの？

— 備え付けのはとっても金目で。

— それは売れんて。 とにかくもちょっと現実考えや。どうするの。

— どうするもなにも出るって。

— じゃこの紙に名前書いて、日付入れて、それからハンコ。

— ハンコ、今度もってきます。

— 押してその日から一か月家賃払ってもらうからね。

— 世の中って、金で回ってるのね。

— そう、僕、お金好きだよ。君嫌い？ 嫌ならどんどんうちに払ってね。

払いたくないので翌日ハンコを持って行った。

事務所の前に張り紙があった。

「永らくのご愛顧ありがとうございました。無事定年をむかえ、年金生活に入らせていただきます」

え？

どおしよう。

とりあえずしろちゃんにメッセージを送ってみた。

数秒後、エラーメッセージ表示。アドレスに間違いあり？

携帯変えた？

思っている間に携帯の画面が黒くなった。電池切れ。

とにかく部屋に帰ることにする。

坂の上のあの部屋に。

足が重い。坂の脇には居酒屋、縄のれんが揺れている。

日も暮れないうちからあそこはいつも大盛況。

遅くなったらタクシーで帰ったほうがいいかもしれない。

駅にはタクシーは入れないから、他からどうにか遠回りにでも。

それより今日の晩御飯、どうしよう。

この町の店には入りたくない。今から隣の町まで買い物に行く？ ここまで登った坂をまた降りて？

部屋に何かあるだろう。

ああ、ここはどうしてこんなに坂が多いの。

— あの子にするで。

喧噪の縄のれん越しに、坂を上る通行人を見て男が言った。

— 来週までにあの子落とす。勝ったら一年間メシおごってくれるんやろ。

連れの会社員風のひよろ長い若造が、とんでもないと声をあげた。

— 理由をぶっちゃけてここに連れてくるんでしょう。ただ飯のためならそのくらいする人ですよ、先輩は。

— 目標達成に時間はかけん。食うには手段も選ばん。武士に二言はないんやろ。

— 僕は町人です。ちゃんと彼女ができたらおごるって言ったんです。近藤さんみたいに、

— おもしろい話とおやん、わいも混ぜて、

隣の常客が身を乗り出す。

— どの子？ どの子？

— やかましい、おまえは関係ないやろ。

— あの坂上とお紺色のリクルート姿みたいな女の子です。近藤さんがあの子連れて来たらこの話は無効ですよ。証人になってくださいね。

— なんでやねん。俺はあの子にするんじゃ、ちゃんと俺の彼女にしたる。ホンモンの彼女やったら文句ないんやろ。

— あのコロっとしたコか。ふうん、コンちゃんには渡さんで。わいが先に連れてきて一年間ただ飯をゲットしたる。

— どうして木村さんが出てくるんです。これは僕と近藤さんの、

— そおや、男と男の約束や、ほれ固めの杯交わせ。

— その杯ワシも混ぜて、

後ろから誰かが割りこんできた。

— あたしも～、

そして次々に。

ふもとの縄のれんから騒ぎがここまで聞こえてくる。

いいなあ、脳天気はこの町になじめる人は。

能天気になればなじめるんだらうか。

能天気でやってみようか。

考えないことには自信があったんだけどな。

雨にも負けず風にも負けず、坂をのぼれる丈夫な体で。

立ち止まってぼんやり彼方の頂上を眺める。

なんだか泣きたくなってきた。

ため息をついた瞬間、駆けあがってきた誰かがいきなり腕をつかんだ。酒の匂いがあたりを包む。

ぎゃあああ、信じられないくらいの叫び声が喉から出た。

サワが行ってしまった。50センチ四方の木の床がのっぺりと広がっている。サワの頭が乗っていた白いクッションももうない。いつも寝てばかりいたサワ。ただ、「サンポ」とささやくだけで一瞬にして体を起こす。スーパーの袋を広げていると三角の耳をぴんと立てて身を起こす。ご飯のたびにテーブルに鼻を乗せ、じっと見上げてる。あんなに楽しく過ごしたのに。もう一か月も一緒にいたのに。お礼のお土産は海の底で拾った金貨。ギリシャ？ ローマ？ 異国の文字がロマンチック。でも、お土産よりもサワが恋しい。

今朝、サワは不意に身を起こした。壁に向かって耳を立て、くうん。3月3日。確かに今日はX-Day。飼い主が帰ってくると言っていた日。でも犬の頭に日時を言っても理解できまい。それに、飼い主はいい加減な男だった。それでもサワは一心に壁の上方を見上げ、それからベットと机、洋服ダンスで詰まった隙間にある、せまい床を、ぐるぐるぐるぐる回りはじめた。回転は秒刻みで早くなる。3月3日。飼い主はこちらに向かってくるのだろうか。

普段は時間ひとつ守れない男なのに。

寝坊寝過ごし寝穢(いぎたな)い、3寝男は、正午に迎えに来るといったのだ。

時計の針は9時を指している。

それでもこちら動物の勘を信じるしかない。もしくは感覚というのだろうか。こっちもジャージからジーンズ、Tシャツに着替え、ベットの上を整える。サワの大きな体がドーナツになりそうな勢いで回っている。もう外に出してやるべきか。しかし、道を飛び出されたりしたらまだ引渡し前のこちらの責任だ。でも、この巨体にこの築200年は経つ古アパート、壁でも突き破られたらいったい誰が弁償するのか。犬を預かる今の店子か、壊した犬の本当の飼い主か。

犬の聴覚はどのくらい遠くにいる飼い主の車をとらえるのだろうか。それとも嗅覚？ ぐるぐるぐるぐる、もう何分も回り続ける。こっちとしては緊張勘が続かず、ベットの上に腰を下ろす。白い尻尾が一定の周期で膝にあたる。あんた邪魔よとばかりしっぽがひっきりなしにこちらにこちらに当たる、彼女の頭の中には今、ご主人様しかいないのだろう。自転車で伴走し、仕事場と家を毎日往復二時間走ってくれる30才。365日毎日一日二回ご飯をくれる男。大きな声で話しかけ、仕事先でうるさいといわれる建築家。君の飼い主は一か月、彼女との過ごすことを取ったのだよ。

君は置いていかれ嬢なんだよ。

それでも君はあいつがいいか。

サワはぐるぐる回っている。

こちらは階段を上がる音に耳を澄ます。

その前に、四階下のアパートの、玄関のドアが聞こえるはずだ。いや、ドアベルか。サワがいきなり動きを止めた。ドアの前に座りこむ。鼻をぴったりくっつけて、三角の耳を大きく立て、瞬きせずに見つめていく。犬の視覚はドアの向こうを見透かすのだろうか。いよいよ来るかこちらにも立ち上がる。ドアベルが故障しているのかもしれない。玄関のドアの閉まる勢いが弱まっ

ているのかもしれない。いや、あの男が木の階段を、近所の人へと配慮して、そっと上がってくるとは思えない。たとえ時間が日曜日の朝九時過ぎであるにしても。

時間はまだある。飼い主の彼女も来た時のために、お茶の一つも用意しておくべきか。けれど共同キッチンはドアを隔てた廊下の向こうだ。炊事場に行くにはこの巨体を乗り越えなければいけない。ドアを開ければサワは一目散に駆けて行ってしまう。飼い主へと。その間にあろう障害物は、大型犬の巨体を無事によけてくれるだろうか。人とか車とか、子供とか。それでなくともこの一か月、散歩先で、どれだけウサギと猫の出現が怖かったことだろう。

サワの鼻がドアにくっつく。切ない声を鼻からもらす。声はどんどん大きくなっていく。

窓の外で車が止まる音がした。サワはドアの反対側にある高い窓に振りかえる。換気で上だけ透かした窓から歩道を歩く足音がきこえてきた。サワが土足でベットに飛び乗る。窓に前足をかけ、天井近くの隙間に鼻を押しつける。ここは4階。見えるは向かいのアパートばかり。人にとっては。窓は今どきのサッシに改装済みで、そんじょのことでは突き破れない、はず。四階から身投げをすれば、犬は無事に着陸できないだろう。今度自宅で預かるならば、猫にするべきか。思ううちにベルが鳴った。こっちのインターフォンのマイクには、サワの鼻で話せない。飼い主には愛犬の鼻声がきくと聞こえているはずだ。インターフォンがなくても聞こえる。ロックを解除した。私も耳にも階段を昇る足音が聞こえてきた、思ったとたんサワは扉に体当たりをした。

厚いだけが取り柄の古い木造ドアはあっという間にサワと飼い主を再会させた。

朝夕もう散歩に行かなくてもいい。この一か月、雨の日も風の日も、散歩がどんなに大変だったことか。毎日続けるというのは本当に何かを成し遂げるには十分な努力だ。でも、サワは行ってしまった。今日はアパートから一步も出るまい。今日は一日飼い主の彼女がサワを見てくれるそう。明日から、訪問散歩係に任命をされた。朝一回夕一回。自転車で5分の距離にある彼の家に通って、サワを連れ出し一回一時間ほど走らせる。

サワは飼い主の帰還を、最大の愛を持って歓迎したのだ。階段の上から飛ぶ巨大なピレネ犬。飼い主が2階まで上がって、踊り場まで来ていたことが不幸中の幸いか。60Kgの巨体で熱烈な体当たりされたら、どんな大男でも踏みこたえられるまい。スキューバーダイビングに行って無事帰国し、その足でいきなり入院とは。今回はお散歩係に引き続き任命をされたけれど、エレベータなしアパート4Fに住んでいる限り、次のペットホテルの代行役には、もう選んでもらえない。

私は財布をポケットに入れて外に出た、

日曜日、空は抜けるように青い。

もしも明日があるとしたら

<http://p.booklog.jp/book/93147>

著者 : kei M

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93147>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93147>

表紙 : Louis de Carmontelle (十八世紀)

ストラスブール装飾博物館所蔵

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ